

消防評論

都市伝説とフェイクニュース

～消防関係者もしつこく発信を繰り返すべき～

東京理科大学総合研究院 教授／博士(工学) 小林 恭一

「ホースが繋がらなかった」 という都市伝説

阪神・淡路大震災から25年、改めてあの震災を振り返る企画が各所であり、以前から気になっていた「都市伝説」にまた出会った。

「当時は消防本部ごとにねじ式と差込式の2種類の結合金具が混在していたため、応援部隊の間でホースが繋がらない事態が生じ、大火が長引く原因の一つになった。」というのが、その「都市伝説」である。

このような趣旨の報道は当時からあり、その後も折りにふれて繰り返されて来たが、私は、当時から「そんなはずはない」と大きな違和感を抱いていた。

当時も今も、結合金具には差し込み式とねじ式の2種類があるが、当時、ねじ式を使っていたのはほぼ東京消防庁だけだった。従って、東京以外の応援部隊の結合金具は全て差し込み式で、当然、結合には問題なかったはず。一方、東京消防庁は、結合金具が他都市と違うことは良く知っていたので、応援出動の際には相互接続が可能になる媒介金具を携行して行った。それを使えば、「ホースが繋がらなかった」ことは、なかったはず。これが、私の感じた違和感の理由である。

差込式とねじ式

結合金具には差込式とねじ式があることはご存じのとおりである。この差込式は、通称「マチノ式」とも言われ、大正11年(1922年)に現在の日本機械工業(株)(NIKKI)の前身企業の町野さんという方が発明したもので、当時、日本のほか、ドイツとアメリカでも特許をとって製造販売を始めたとされている(NIKKIのHP)。差し込むだけでホースを結合でき、水圧をかけても漏れないというのは確かに大発明で、日本の多くの消防機関ではこのマチノ式が採

用された。

検定制度と検定規格

消防用機械器具等の検定制度は昭和38年(1963)4月の消防法の改正で創設され、政令第37条で定める消防用機械器具等は、昭和38年(1973)12月の同条の改正で初めて具体的に列記された。その第1項第5号に「消防用ホースに使用する差込式の結合金具」が掲げられている。結合金具の規格もこの時に定められているが、その性能の確保に合わせ、互換性の確保も、結合金具を検定制度の対象とした大きな理由だったと考えられる。

結合金具が検定制度の対象となった当時、マチノ式(差込式)が主流だったため、規格はこの1本に統一されたのだが、当時、東京消防庁など幾つかの消防機関はねじ式を採用していた。東京消防庁が、大正時代に発明された便利なマチノ式でなく、昭和の時代になってもねじ式を採用していたのは、マチノ式だと現場での過酷な使用に不安があったためだという事だ。

大口需要家である東京消防庁がねじ式を採用していたためか、マチノ式でも検定に耐えられる性能が確保できることが確認されたためか、いずれにしろ、昭和45年(1970)3月の政令改正で、検定対象となる結合金具にねじ式が加えられた。これにより、「互換性の確保」という検定制度の大きな目的の一つが歪められることになったのだが、その辺の経緯はよくわからない。

いずれにしろ、阪神・淡路大震災当時、結合金具が検定対象だったことは確かである。その後、平成25年(2013)3月の改正で結合金具は自主表示対象になり、現在、その規格は自主表示対象機械器具等の規格を定める省令によって定められているが、規格上はいまだに差込式とねじ式が併存している。

何故「ホースが繋がらなかった」が定説になってしまったのか

阪神・淡路大震災の長田区などの火災では水利の確保に困り、海などの自然水利から1～2km以上の長距離送水を余儀なくされた。この時、ホースの1本当たりの送水量が小さく、またホースが通過車両に轢かれて破損したりしたため、その後、大量送水システムが整備されるきっかけになった。

この時には、通常は行われない複数市の消防ホースを接続することも行われた。これについて、震災後にまとめられた全国消防長会の「消防広域応援実施に関する検討結果」では、規格の違いにより活動上支障があったのではないかと指摘があるが、「それぞれの応援隊は、臨機応変に対応したため支障はなかった…」としている。

また、平成13年(2001)3月にまとめられた総務省消防庁の「阪神・淡路大震災にかかる地震防災対策検討委員会」報告書では、ねじ式の結合金具を採用している消防本部は5本部であるとした上で、規格の違いは媒介金具を使用すれば対応可能であるので、「ねじ式を採用している消防本部においては、管轄区域を越える応援・受援の場合に備え、必要数の媒介金具の装備を徹底する必要がある。」としている。

さらに、緊急消防援助隊の装備の基準について、「消防本部ごとにホースの口径が異なることで円滑な消防応援活動に支障をきたす事態を避けるため、消火部隊の基準として65mmホースが指定されている。」という記述もある。

これらの記述からは、普段行わない他都市の消防ホースとの結合にあたり、口径が異なるホースを結合しようとして結合できなかつたり(当たり前だが)、媒介金具が足りなくなつたりして、苦労しながら何とか送水して消火活動を行った様子がうかがえる。

そんな苦戦する応援消防隊を見て、報道機関が聞きかじりの知識で「結合金具が違うためにホースが結合できない」などと報道し、そこに「そんなこともあるだろう」という「社会常識」が加わって、このような誤解に結びついたのでないだろうか。いずれにしろ、差込式とねじ式の規格の違いという単純なものではなかつたということは、理解しておいて欲しいと思う。

なお、東京消防庁では、65mmホースの結合金具については平成14年度(2002)以降順次差込式に交換し、平成26年度(2014)には全て差込式になっているということである。

男の子を発見したのは警察犬??

新潟県中越地震で土砂崩れに巻き込まれた車が発見され、崩壊危険の極めて高い現場で東京消防庁のハイパーレスキュー隊が、車の中に閉じ込められていた男児を救出した話は、ご記憶の方も多だろう。私は、当時、総務省消防庁の危機管理センターで指揮を執っており、その場面に鮮明に記憶している。最近びっくりしたのは、男児を発見したのは警察犬という話が広まっていることだ。

あの時の報告では、現場は極めて危険で、地上ではハイパーレスキュー隊しか捜索活動ができず、他の関係者は安全なところにいる、という話だった。

これについて、東京都の報告書では警視庁の活動について、「警察庁から、ヘリコプターからの降下が可能な災害救助犬の派遣要請を受け、捜索班を派遣し…消防救助隊と連携して男児1名を救助した。」と、微妙な書きぶりになっているが、救助犬が男児を発見した、という記述にはなっていない。

一方、東京消防庁の報告書では、「検索開始直後『声が聞こえる』との情報あり、サイレント・タイムを設定。」「なお、初回の車両腹部側の検索時には、生存者の男児は確認できなかったが、声を聞いたため開口部の設定に着手した。」と、ハイパーレスキュー隊が声を頼りに男児を発見したという記述になっており、当時危機管理センターで事態の推移を見守っていた私の記憶とも合致している。

ということで、警察犬が男児を発見したはずはないと思うのだが、試しにネットで「新潟県中越地震 優太君 警察犬」と検索すると、その種の記事がたくさん出て来る。あまりにも多いので、「そんなはずはない」と思っている私ですら、思わず「そうだったかな」と信じてしまいそうになるくらいだ。

必要なことはきちんと発信すべき

結合金具の話も警察犬の話も、当時を知る人は「そんなはずはない」と確信しているのに、「都市伝説」や「フェイクニュース」が繰り返されるうちにいつの間にか定説になってしまっている。「そんなはずはない」と思っても、現場にいないのに声をあげても説得力がないと思い、つい口をつぐんでしまう。その間にも、都市伝説やフェイクニュースは平気で繰り返され、時間が経つと定説と化してしまう。消防関係者も、必要な時にはしつこく発信を繰り返すべきだと、私自身の反省も含めて改めて思う。

(本誌編集委員)